

## 【報 告】

# フィリピン・スタディツアー報告

上村ゼミナール  
(文責：上村信幸)

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 スタディツアーの概要
- 3 スタディツアー初日の活動
- 4 パヤタスでのフィールドワーク
- 5 路上教育フィールドワーク
- 6 むすびにかえて

## 1. はじめに

本報告は、日本とフィリピンとの国境を越えて実施してきた社会貢献プロジェクトである令和元年度スタディツアーについての報告である。国士舘大学政経学部政治行政学科に在籍する上村ゼミナールでは、フィリピンなどで国際的支援活動を展開するNPO法人アイキャンと提携して様々な活動を行ってきた。その中心的な役割を担ってきたのが二年生ゼミナールである。フィリピンでのスタディツアーを契機とし、地球的な格差の問題について学習することを目的に、現地でのフィールドワークやボランティア活動等々を手始めに、帰国後も、年間を通じて活動を実施してきた。ここでは、その一部であるスタディツアーについて報告する。

## 2. スタディツアーの概要

まず、フィリピンでのスタディツアー開催にあたり、スタディツアー参加学生は、夏休みに2日、前年度にスタディツアーに参加した三年生にも加わってもらい、教材学習含むを事前研修をおこなった。そこでは、ゼミ先輩の実際の体験を情報共有しながら、これからスタディツアーに参加する二年ゼミが不安に思うことや疑問点などについて質疑応答をおこなった。タガログ語の簡単な会話学習も行ない、研修は有意義な交流の場となった。そして、夏休みも後半に差し掛かった9月4日から8日までの5日間、二年ゼミ生はスタディツアーに参加した。現地での5日間はホテルではなく、認定NPO法人アイキャンが運営する施設「子どもの家」に宿泊し、そこを拠点にスタディツアーの諸活動に参加した。路上の子どもたちの自立支援のために建設された同施設に滞在することで、スタディツアーに参加したゼミ学生にとって、常に現地の暮らしに触れながら、多くの学びを得ることができたことが得難い収穫となった。以下に、学生の声を紹介しながら、今回のスタディツアーについて報告を記す。

## 3. スタディツアー初日の活動

### 小池真央

スタディツアー1日目ではまず、フィリピンの中でも比較的裕福な人々が集まる都市のショッピングモールを訪れた。そこではいくつかの発見があった。まずは物価についてである。空港で日本円からフィリピンペソに換金した際、5040円で2000ペソになったことや、事前学習で先輩方からも聞いていたため物価は安いと考えていた。確かにショッピングモール内のスーパーでは500mlの水が15ペソくらいだったため安いと感じた。しかし、近くにあった日本でも馴染みのある店の商品はTシャツ一枚1000ペソなどと日本と比べても比較的高いと言えるような値段がついていた。日本とほとんど同じ質の商品を販売していることからあまり値段を下げることができず、また、輸送費などの諸経費が上乗せ

されることが比較的高い値段を設定している要因だと考えられる。ショッピングモールではこのような店が多く入っていた。ツアーのスタッフの方にフィリピンの平均収入は一日約500ペソと教えていただき、そのことからショッピングモールにくるフィリピンの人々はそれだけ裕福な人々であることが予想できる。

次は教会についてである。フィリピンのショッピングモールには教会が併設されていることが多いそうだ。私たちが訪れたショッピングモールもそのうちの一つであった。フィリピンでは約90%がカトリックで、日曜日に家族で買い物にやってきて、そのまま教会でお祈りをする文化が根付いているそうだ。私自身あまり宗教について詳しくはないが、初めて海外に来たこともありすごく新鮮に感じた。私たちが訪れた際も何人かお祈りをしている人もいた。静かな凜とした空気がとても印象的だった。

それから私たちは宿泊先である子供の家へ向かった。子供の家では5人の子供が生活していて私たちは生活を体験させていただいた。子供たちは年齢が13～17歳で、私たちの前で自己紹介した際は少し緊張していたせいか恥ずかしがっていたが、夜に一对一で話した際はとてもフレンドリーで笑顔も見られた。子供の家で暮らしている子供たちが入居してくるパターンは三種類ほどあった。一つは別の施設から移動してくるパターン、残りは路上の子供達を見つけたDSWD（社会福祉施設）もしくはアイキャンのスタッフが連れてくるパターンである。いずれも身の頼りのない子供達がいるのが現実だ。後からわかることだが、子供の家で暮らしている子供は2日目以降に触れ合う子供たちに比べると比較的裕福な生活をしている。路上の子供たちにも同じように安全な水や食料が確実に届くようにしたいと思っても難しい部分があるのが現実である。それは、家族の事情や子供の家で生活できる人数にも限りがあるからだ。

### 遠藤楓也

フィリピンに着いてまず一番最初に思った事は、当たり前のことなのですが日本語がまったくなく、海外に来てしまったのかという感じでした。気温や空気は日本とあまり変わらないような感じがしました。私たちが日本にいる時に

感じていた外国人に対する目が逆に自分たちに向いていて、逆の立場になってみて初めてこのような感覚なんだと分かりました。マニラ空港を出たらクラクションの音がすごく鳴っていてとても騒がしかったです。運転は荒く、間があればどんどん入って来たり、クラクションを鳴らしたりと、日本とはあきらかに違うように感じました。交通整理をしている人はみんなサングラスをかけ、拳銃を持っていました。日本では交通整理をしている人が拳銃を持っているのは見たことがなく、あまり治安が良くないのではないかと感じました。実際に車に乗ってみると、ものすごく運転は荒くてジェットコースターに乗っているような感覚でした。マニラ市内は栄えているところと貧しい地域がありました。路上で物乞いをしている子供たちや、歩道にスペースを作って住んでいる人がいて、早々に衝撃を受けました。衣服も汚れていたり、日本との違いを感じました。最初はフィリピンに住んでいる富裕層の人たちが行くショッピングモールにいきました。ショッピングモールはマニラ市内の中心にあり、日本の東京とあまり変わりのないと感じました。気になったこととしては、車の量が多いにも関わらず信号機の数が多いと感じました。ショッピングモールに入ると、多くのブランド店や日本でも馴染みのあるような店が並んでいました。ルイ・ヴィトンやグッチなどもあり、日本と同じ店も多くありました。私たちは無印良品に入り、日本の物価との比較をしました。物の値段に関しては日本とあまり変わらず同じくらいの値段でした。しかし、日本の時給とフィリピンの時給は格段に違い、フィリピンでの一人当たりの所得がとても少ないことに衝撃を受けました。私たちは無印良品の商品を買うのに何も抵抗なく購入することができますが、フィリピンに住んでいる人たちにとってはとても難しいことなのだと感じました。スーパーへ行くと日本と違いとても物価が安いことに驚きました。日本ではペットボトルの水一本約100円するのにに対し、フィリピンでは一本約20円で買える物もあり衝撃を受けました。その面に関しては羨ましい部分がありました。カップヌードルなどもあり、いろいろな種類がありました。日本には売っていないような物だったり、スーパーでさえいろいろな興味を惹かれ

ました。子供の家に着き、フィリピンで初めての料理を食べました。日本にいる時は少し抵抗があったのですが、とても美味しく、食事に関してはなんの問題もなく美味しくいただくことができました。シャワーが水しか出なく、とても冷たく苦労しました。

### 新井峻太

出発の朝、緊張と不安な気持ちがあるがすごく強かった。その理由はスタディーツアーで行くフィリピンは当時デング熱が流行しており、警報が出ていたからだ。そのため、現地での活動は長袖、長ズボン着用と言われていた。デング熱というと2014年に代々木公園などが立ち入り禁止になったことや、国内で発症し救急搬送された人がいることもあり、ニュースで放送されていたため、記憶に新しいのではないかと思う。しかし、そのような不安は飛行機に搭乗し離陸することにより少しずつ和らいでいった。デング熱の不安よりも「スタディーツアーをがんばろう」という気持ちの方が強いからだ。日本時間の9時45分全日空の飛行機で出国した。そして、現地時間13時20分にマニラ国際空港に到着した。入国審査を済まし、いよいよだという気持ちを持ち現地で活動するアイキャンのスタッフの方たちと合流した。商業都市であるマカティに向かうためハイエースのような車で移動したが、到着して早々に驚いたこと多々ある。まず交通量の多さだ。空港の周辺ということもあるかもしれないが、見渡す限りに車が並んでおり、はるか先まで渋滞している。また、バイクの運転手や、同乗者はヘルメットを着用しておらず、事故に遭ったらどうするのかと思ったほどである。そして最後に運転技術である。隙間があれば車線変更をするなどしているため、四方八方からクラクションが聞こえるなど、想像以上に驚いたことを覚えている。しかしこれはフィリピンでの日常で時間が経つにつれて私自身も何も感じなくなるほどであった。そして商業都市であるマカティに到着した。このマカティという都市はフィリピンの方たち全員が利用しているわけではなく、富裕層や外国人、旅行者などが利用しているのである。そこでまず感じたことは物価についてである。スーパーなどで水を買うと、15ペソ

(約 30 円) ほどで買うことができる。しかし、同都市には無印良品や多くのブランドなどが出店しており、価格を見ると日本と同じかそれよりも少し高いくらいであった。アイキャンのスタッフの方に、フィリピンの平均日給は約 500 ペソ (約 1000 円) であると教えて頂いた。そのことから商業都市で買い物ができるのは富裕層、外国人、旅行者などであることが納得できた。

その後、マカティを散策した後は宿泊先でもある「子どもの家」(アイキャンセンター) に到着した。子どもの家は、路上の子どものうちのうち、5 歳～12 歳の子供たちを保護することができ、最長 18 歳まで入所することができる。そしてこの施設に入れる条件が 3 点あり、他の施設から移ってくる、DSWD (社会福祉施設) が路上にいる子供たちを探してアイキャンに紹介してくる、アイキャン職員が直接街から保護してくることでであると説明を受けた。現在は 13 歳から 17 歳の男の子たちが職員の方達と暮らしている。この施設で私たちは滞在中お世話になった。

#### 4. パヤタスでのフィールドワーク

##### 高田雄太郎

フィリピンボランティア活動 2 日目はパヤタスに行きました。前日は夜に子どもの家に到着し、なおかつ街には街灯がないため外の景色がわかりませんでした。2 日目パヤタスに向かう際に街の風景を見渡すと、ところどころ壊れた家に大家族が生活していたり、野良犬や野良猫がそこら中に生活していたのを目の当たりにして日本との違いを改めて感じました。この日もやはり交通量は多く原付バイクや車はもちろん「トライシクル」と呼ばれるバイク型タクシーが走っていたり、「ジープニー (ジープ)」と呼ばれるバスのような乗り物が走っていました。

パヤタスに到着しアイキャンの施設と地域の診療所が連携した建物に入り屋上へ向かいました。屋上からは緑の草木に囲まれた大きなゴミ山が見えました。事前学習でパヤタスはゴミ山になっていたと学んできたので生ゴミの匂い

が凄く臭かったりゴミが剥き出しになっていると思っていました。仲間たちの中で少しゴミ臭いという人もいましたが私自身は臭いと感じませんでした。少しすると、現地のスタッフの方からパヤタスの説明がありました。この地域では2000年に崩落事故がありたくさんの犠牲者がでたことによりフィリピン政府が対策を取りゴミ山を封鎖しました。これによって今までゴミを拾って生活していた人（スカベンジャー）たちは職を失い収入もなくなり生活できない人が増え大変な状況が起きたようです。ごみ山はこの周辺で生活している人たちにとっては害的な部分もある反面、ないと困る存在であったのだと感じました。その後、家庭訪問をしました。私たちのグループが訪問した家庭はご夫婦と子どもが3人の5人家族でした。家は扉という概念がなく、壁はベニヤ板屋根はトタン屋根、全体で3畳くらいのスペースしかないとても簡易的な家でした。この家庭の旦那さんはスカベンジャーでパヤタスのゴミ山が閉鎖されたことで違う場所のゴミ山に出稼ぎに行っているようです。奥様に複数インタビューをさせてもらいました。1つ目に「夢はなに？」と聞いたら子どもたちが学校を卒業させることと話されました。この奥様は自分よりも子どものためにという犠牲心がすごい方で何よりも子どもためを思っている方でした。2つ目に質問したことが「幸せの瞬間とは？」で、その答えとして家族でクリスマスにレストランに行くことだと話してくれました。その時に私は食べたい時や行きたい時にレストランに行けることや家族揃って食事を取らなくなった現代日本人の生活スタイルを改めて考えさせられました。

そして、家庭訪問も終わりましたアイキャンの施設に戻りました。そこでフェアトレード商品について学びました。上記で述べた通り、ゴミ山が閉鎖され収入源が減ったのでアイキャンは生活費の足しになるように地域のお母さん方に熊のぬいぐるみ作りなど技術支援を積極的に行ったようです。技術支援のおかげで今ではクオリティが上がり細部にこだわったぬいぐるみやキーホルダーが出来上がっていました。お母さんたちの想いや支援のつもりで私も小さな熊の人形を購入しました。日本ではフェアトレード商品を売っている企業をたまに見かけますがそれが何なのか日本人はわからない人が多いと思いますし、私も

今回スタディツアーに来るまではわかりませんでした。したがって、途上国を支援しやすい先進国の国民がフェアトレードについて理解してもらうための広報活動や取り組みが重要であると考えました。

## 山 海

2日目はパヤタスのごみ処理場に行った。ごみ処理場は閉鎖されて、草が生えて普通に山みたいになっていた。人も入っておらずもう完全に閉鎖されたことを実際に見ることが出来た。閉鎖される前のごみ山は話を聞くだけでも恐ろしいものであった。実際に見たごみ山は元々きれいで川があり谷があったようだが、いつ頃からか谷に生活ゴミや医療ゴミなど様々な廃棄物を溜めていき、今のごみ山になってしまった。山になるまでにどれだけのごみを埋めていったのか、私はもう考えることすらできなかった。2000年の崩落事故が原因で300人もの人が亡くなってしまった。それにより政府が対策を取りごみ山は閉鎖されることになった。閉鎖されたことでスカベンジャーとして働く労働者たちは仕事を失い生活に困る人も出た。私は大きな事故が起きない限り政府は対策を取らないのだと感じた。今は閉鎖されて植林したことによってにおいがなくなったというのが自分はその中でもおいを感じてしまった。

その後パヤタスのフィールドワークをした。ごみ山の近くということで都心との地域格差がはっきりしていた。ある家庭に訪問させていただいたが、その家は8畳あるかないかで作りはトタン屋根で壁もベニヤ板でできていた。この家庭は夫婦と子ども4人の6人家族だった。奥さんにインタビューをすると、昔に旦那さんはスカベンジャーをやっていて、ゴミ山の仕事で出会った。彼女の夢は子ども4人を学校に通わせて、生活水準を上げたいと言っていました。幸せとは、12月に家族でレストランに行ってお食事をすることが幸せだと言っていた。つらい時はお金がない時でたまに1日ご飯を食べることができない時があるそうだ。インタビューをして自分の思う幸せや夢とは全然違っていった。どれだけ日本が恵まれていて、夢や幸せの幅が大きいということが身にしみてわかった。つらいことも自分にとってはつらいことだけどうでもないつらさで自分の生き方を考え



させられた。

フェアトレードの生産している団体（SPNP）と交流をした。SPNPとはパヤタスで働いているお母さんということです。SPNPにアイキャンはテディベアの作り方を教えたことから繋がりが出来た。トレーニングをして自分たちでテディベアを作れるようになった。2004年SPNPに独立を持ち掛け、アイキャンと共同という形になった。今はアイキャンがやっていたようにSPNPは現地の人に支援することが出来るようになってきている。アイキャンが掲げているエンパワメントが実現することが出来ていて感動した。小さいところから地道に時間をかけていけばこのような大きい支援が出来ることが理解できた。

住民団体のPICOと交流をした。PICOの活動としては炊き出し、診察、薬局、である。PICOが教えていることは生活するうえでの知識、有効なお金の使い方、体を清潔に保つにはどうするかだった。PICOには一人の医師がいて、132万人を3つに分けた一つのエリアを診療している。病院に勤務しているにかかわらず、毎週診療するためにPICOに参加している。その医師の人は自分のやっていることに誇りを持っていて、人助けのために生きていた。自分の考えとは真逆で心が動かされた。

### 滝澤 樹

朝食のパンを食べた後、私たちはパヤタスゴミ処理場に向かった。パヤタスは2000年のゴミ山崩落事故により世に知られるようになった。パヤタスには大きなゴミ山がありそのゴミを集めて生活をしている人達が多く住んでいた。2000年7月スモークマウンテンが崩落300人が行方不明になった。その日は大雨で多くの学生が行方不明になった。この事故により政府はパヤタスのゴミ山を閉鎖し木を植え、ゴミ山にはIDを持つ人しか入れなくしたりと色々な整備が行われた私たちが行った頃にはゴミ山は草木に囲まれていて、普通の山のようになっていった。一見ただの山でゴミ山がどこにあるのか全く分からなくなっていた。そんなパヤタスではアイキャンが運営している職業訓練所で、職を持った現地のお母さん方からお話を聞くことができた。パヤタスは1960年頃

からゴミを集めるようになった。1973年からパヤタスは正式にゴミ処理場となりジャンクショップでゴミを売って生計を立てる人達が増えた。スカベンジャーはとても危険な仕事で、ゴミ山は熱く、ゴミに混ざる刃物で怪我をしたり、ゴミを運んでくるブルドーザーに轢かれて死ぬ人も多くいる。またゴミからつくった食料を食べて食中毒になってしまう人など環境は最悪だったと言う。今、パヤタスはゴミから出る熱で発電を行い環境は良くなってはいるものの周りで暮らす人達は仕事を失い、多くの人は、新しくモンタルバン地域できたゴミ山に流れていったと言う。そんな話を聞きフィリピンには焼却施設の導入がないためこういうことが起こってしまい繰り返してしまうのだと良くわかった。

次にパヤタス周辺に住むエドリンさん23歳の話を聞くことができた。エドリンさんの家は路地裏の奥まった場所にあり、屋根はブルーシートで作られており畳4畳ぐらいのワンルームに二男二女と夫6人で暮らしている。子供はまだ小さく、大きい子でもまだ小学校低学年ぐらいだった。エドリンさんの夫そして母はスカベンジャーとして働いていたがゴミ山閉鎖後、夫はペットボトルを仕分ける仕事をしているらしい。家賃はなく、電気代もかからないと言う。だがこれは間借をしているのでただと言うことらしい。彼女の夢は、4人の子供全員が学校を卒業するという事で、一番の幸せはクリスマスに家族で過ごすことだとも言っていた。この後、アイキャンの職業訓練でぬいぐるみを作っているお母さんにも話を聞いたのだが、やはり子供を卒業させることが大変で一番願っていることらしい、子供が学歴を持てばいい所に就職して生活が改善できるということらしい。それを助けるためにアイキャンではお母さんたちに職業訓練を行い職を与える活動している。これがどれだけ重要な活動をしているのがよく分かった。そして子供の家に戻り2日目が終わった。

## 5. 路上教育フィールドワーク

### 東美菜萌

スタディツアー3日目。今日はバランガイという地域の路上の子供たちと

コミュニケーション，そしてカリエカフェを運営している人達の自宅へ家庭訪問しに行きました。

路上の子供たちが実際に暮らしている地域のバランガイを訪れて、実際に様子を見てみたら、想像していたようなイメージと違っていました。私が想像していたものは、昨日訪れたパヤタスのような街並みで、その路上で暮らしているものだと思っていました。しかし、実際のストリートチルドレンが暮らしている街は騒然としていて車がひっきりなしに通っており、騒しい街にあちこちで人が寝転がっている様子です。バランガイという地域は元々日本軍が占領していて、日本軍が撤退したあと中国人が住み着いた為、中華街で見かける様な建物が目に付きました。私たちから見ればかなり衝撃的な事です。

街の散策を終えたあとに実際のストリートチルドレン達と交流しました。子供たちはとてもはつらつとしていて本当にストリートチルドレンなのかと疑うほどに清潔感がありました。

自己紹介や簡単なルールのゲームを遊んだ後、ストリートチルドレンの1人であるダニカちゃんという女の子の話をインタビューとして聞きました。やはり路上での生活が苦しいという言葉が出てきました。ダニカちゃんは川の近くの路上に住んでいて、自分の家は無く、雨が降った時はベニヤ板や新聞紙を敷いて暮らしているそうです。日本と貧困のレベルが全く違うことが明らかになりました。

小さな頃から自分が働かないと食べていけないような子供がフィリピンにたくさんいることを知って、日本にいて当たり前だと思っていたことはフィリピンではまったく当たり前ではない、むしろ自分は恵まれていたことを自覚しました。小さな子供に対して自分は何かを与えることは何も出来ませんでした。こういった貧困の現実を知ることによって物事の認識を変えて行けばいいなと思いました。

次にカリエカフェに訪問しました。カリエカフェとは、マニラの元ストリートチルドレンの若者たちが運営するカフェのことです。フィリピン大学という将来の政治家や社会を担う有為になる人を多く輩出している大学の敷地内に

構えており、職業訓練に加えて路上で生活している人の現実を知ってもらうことが目的です。「カリエ」とはフィリピンの言葉で「路上」を表します。フィリピンの人は「～放題」という言葉がお得感を感じるため好まれていて、カリエカフェでは時間制でお金を払う形式になっています。なので時間内であればカフェ内に置いてある飲み物や食べ物が食べ放題であり、それが人気の秘密でもあるそうです。

また、カフェの収益や集まった寄付で、カリエのスタッフでもある元路上の若者たちが、現在も路上にいる子どもたちの相談に乗り、またアイキャンの職員とともに路上の子どもたちに給食活動を行うことで、一人でも多くのマニラの路上の子どもたちを、路上から救い出すことを目指しています。

## 七尾玲音

この日の朝は少し早く、7時半に子どもの家を出発した。そして、10時頃にエスコルタ地区という場所に到着した。ここでの目的は、路上の子ども達が勉強をしている事務所子ども達と交流することである。最初に車が事務所の前に着いた時、子ども達が寄ってきて元気よくハイタッチと自己紹介をしてくれた。皆んな路上の子ども達とは思えないくらい元気な子供達だった。

子ども達と遊ぶ前に、私達は事務所の周辺を歩いた。エスコルタ地区には、バヤタスのように貧しい人達が多く住んでいる。ここは治安も悪く携帯やカメラは出さないようにと言われた。少し歩くと、歩道で寝ている家族がいた。下にダンボールを敷いているだけで、とても人が住めるような環境ではないと思った。なにもしてあげられないことがとても悲しかった。

10分程度歩いた後に、事務所に戻り子ども達と交流した。子ども達と一緒に玉入れゲームや折り紙などで遊んだ。私とペアになった男の子は私の名前を覚えてくれて、とても仲良くなれた。皆んなとても優しく元気な子ども達で、こっちまで幸せな気分になった。子ども達がこれからも元気で幸せな人生を歩んで欲しいと思った。

子ども達との交流の後、私達は路上で暮らす女の子に話を聞いた。彼女は父

親が麻薬取引によって逮捕されたため、路上での生活を余儀なくされ、学校にも通えなくなってしまったという。さらに、母親も精神的な病から動けなくなってしまったため、彼女は下の兄弟の面倒を見ながら、復学のための勉強をしているという。そして、彼女の夢は先生になることだという。その理由は「先生になれば、路上の学校に通えない子ども達に勉強を教えられるから」と語ってくれた。彼女はとても厳しい環境の中で自分よりも他人のこと、家族のことを考えていた。そして、欲しいものについて尋ねられたところ、最初は何も要らず、家族といわれれば良いと答えたが、その後にご飯と安全に寝られる場所が欲しいと答えてくれた。私は、今まで貧困問題についてあまり深くは考えてこなかった。しかし、今回の出来事で貧困問題とは国籍など関係なく、全ての人間が考えなくてはいけない問題だと思った。私は、目の当たりにした貧困問題の深刻さに呆然としてしまった。

次に私達はマニラ首都圏ケソン市にある「カリエカフェ」に向かった。カリエカフェはフィリピン大学というフィリピン最高ランクの大学内に位置している。このカリエカフェのカリエ (kalye) とは、タガログ語で「路上」という意味で、店員の方々は元ストリートチルドレンである。このカフェもアイキャンの技術訓練によって生まれた。そして、カリエカフェは、大学生が主に利用する時間制のスタディカフェである。カフェの店員によると、カフェの一番の目標はフィリピン大学のエリート達の意識変革だという。路上の子供達でもカフェ運営ができるということを知ってもらい、差別と偏見を無くすことが目標なのだと教えてくれた。現在では、カフェのメンバーは「カリエ」としてアイキャンの協同組合としても活動し、路上の子供達に自身の経験を話したり、給食活動などを行なっているという。救われる側から救う側へと変わることができたという話に驚きと感動を覚えた。

### 安曾晃平

まず午前中にバランガイに行き路上で生活している人たちの様子を見たり、町がどのようになっているのか学習した。路上にはダンボールの上に座ってい

る家族や病気かなにかで身体に黒い斑点がある苦しそうな犬もいた。街のすぐそばには川が流れていたが、水はとても汚れていた。町や川の匂いはあまり気にならなかった。アイキャンはストリートチルドレンの子供たちに対して路上教育を行っている。路上教育では、生活に必要な知識や技術を教えたり、怪我の治療や身体を洗うことの大切さやお金の使い方も教えている。生活に必要な知識だけでなく、社会に出た際に大切な、人の気持ちを理解することや、対人コミュニケーション、思考力や意思決定も路上教育によって開発している。最初はそんな路上教育を受けているストリートチルドレンの子供たちと一緒にバランガイホールでゲームで遊んだりした。子どもたちは、私たちがバランガイホールに車で到着したらすぐに寄ってきてくれて、最初から元気だという印象を持った。一緒に遊んでいる時も、みんなすごく楽しそうに遊んでいて、本当にストリートチルドレンなのかと思った。日本の子供たちと同じくらい元気で辛い思いをしているようには思えなかった。子供たちと遊んだ後は、ダニカちゃんという女の子に日頃の生活について話してもらった。ダニカちゃんは川の近くの路上に住んでいる女の子で5歳から路上生活を送っている。元々は学校に通っていたが、お父さんがドラッグ関係で警察に捕まってしまうと学校を辞めてしまった。元の学校に戻るための学校にも通っていたが、お母さんが精神的に病んでしまいその学校も辞めてしまった。お父さんは戻ってきてトライシクルというバイク型のタクシーの運転手として働いているが、金銭面で安定はせず、現在も路上生活を送っている。そんなダニカちゃんは家族と一緒にいる時間が一番幸せと言っていた。将来の夢は先生になりストリートチルドレンの子供たちに勉強を教えてあげたいと言っていた。ダニカちゃんに欲しいものを尋ねると、今まで考えたことがないから思いつかないと言っていた。私もそうだが、日本にいる人たちは欲しいものがたくさんあると思う。でもそれは、恵まれている証拠なのだと感じた。ダニカちゃんはたくさん考えた結果、安全に寝れる場所と十分な食事が唯一欲しいと言っていた。日本では当たり前すぎて私たちはその幸せに気付いていなかった。

子どもたちと別れた後はカリエカフェに行った。カリエカフェはフィリピン

の中でもとても優秀なフィリピン大学の敷地内にある。店員のひとは皆ジャストワーカーとして経験を話したりしている。ジャストワーカーとは所謂ソーシャルワーカーのことで、元ストリートチルドレンで路上教育を通して経験を話してくれる。カリエカフェがフィリピン大学内にあるのは、頭の良い人たちに路上の子供たちのことをアピールできるからだそう。フィリピン大学卒業生の中には多くの政治家もいて、今の学生の中にも政治家になろうとしている人がいる。そんな人にストリートチルドレンのことをアピールして対策を練ってもらいたいのでフィリピン大学内にオープンした。店員の人たちはストリートチルドレンだった時を苦しいと言っていたが、今はみんな幸せそうで、中には子供がいる人もいた。最後にアレン君の自宅にお邪魔した。アレン君は路上教育に参加している17歳の子だ。最初自己紹介してもらった時、17歳と聞いてとても驚いた。身長や顔立ちから見て小学生くらいだと思ったからだ。アレン君はご両親と3人の兄弟を亡くしてしまっている。学校に通いながらゴミ回収の仕事をしている。そんなアレン君もダニカちゃんと同じで学校に行けない子供たちを教える先生になりたいと言っていた。その日の夜にダニカちゃんとアレンくんがどちらも学校の先生になりたいと言っていたことをアイキャンの人に言ったら、それは学校の先生以外に職業をあまり知らないことだと思うから、本当は悲しいことだと言っていた。フィリピンの教育に対してもっと子どもたちにたくさん勉強させてあげたいと思った。

### 吉沢 瞳

3日目は、朝から小さな街の市役所のような場所に向かいました。着いた途端、建物から元気な子どもたちが出てきました。私たちの車に乗り込んできて、ハイタッチして自己紹介までしてくれたので、パワフルな態度に圧倒されてしまいました。車から降りると、一旦子どもたちとは離れ、その街周辺を散策しました。路上では子どもを抱いた母親がダンボールを敷いて生活していたり、川辺に置いてあるボートにすら生活痕があったりして、まさに路上で生活して

いる人々が目前にいる環境でした。市役所に戻ると、先ほど挨拶を交わした子どもたちが室内で待っていて、改めて自己紹介をしました。ほとんどの子どもがストリートチルドレンであることを伝えられて、非常に驚きました。普通の子どもと変わらない、もしくはそれ以上に活発的で明るかったからです。その子どもたちとは折り紙やボールで遊んで楽しい時間を過ごせました。その後、ストリートチルドレンの中の一人の女の子にお話を聞きしました。歳は中学生くらいだったのですが、見た目はまだまだ小さい子に見え、そのような点からも貧困の状況が垣間見えました。彼女は、父親の逮捕をきっかけに学校に行けなくなり、復学を目指すも母親の病気や下の兄弟の面倒を見なければならない為、貧しい路上生活が続いていました。欲しいものはあるかとを訪ねると、安心できる暮らしができればそれでいいと言っており、とても私達より年齢の低い子が言っていることとは思えませんでした。同時に、このツアーで初めて貧困の状況と向き合った瞬間でした。彼女たちは家族思いで、人に素直で明るくて、私よりずっと大人でした。

子どもとの交流が終わると、元ストリートチルドレンの方々が経営しているカリエカフェというところを訪問しました。3人の方がお出迎えしてくれたのですが、歳は私達に近くて、フィリピンの同世代の実情を知れたので新鮮で良かったです。このカフェはフィリピン国立大学の中に併設されているので、将来政治家などを志す学生たちへの直接的な啓蒙にも繋がっているそうでした。自分たちの境遇をこういった形で伝えながら、仕事にできることは非常に素晴らしいと思いました。また、このような仕事もあるのだということを、今ストリートチルドレンの子たちにも広がれば良いと心から感じました。

その後は、二度目となる家庭訪問をしました。こちらは1回目お伺いしたお宅よりもこじんまりとした感じで、ワンルームだけで、壁などをうまく使ったりして生活用品を置いて生活していました。まだ私たちより幼い子が、朝から仕事をして大変な生活を送っていたので、自立するというより、しなければ生きていけない環境と言うことに大きな衝撃を受けました。



### 関根聡志

3日目はバランガイという地域を訪れた。この地域は前日に訪れたパヤタスとは違い都市部にある場所だった。バランガイに着いて周辺を10分程散策したところに見えたのが路上で生活するホームレスや、異臭がする水の汚れた川だった。この光景は自分が想像していた貧困地域のイメージに近くパヤタスより酷いものを感じた。しかし1つ違和感としてあったのが、こんな都市部にこのような貧困地区があることが不思議であったことだった。

周辺を散策した後にストリートチルドレンの路上教育を見学した。この路上教育の目的は一般の人が学校でやる学習というよりは生きていくために必要な知識を与えるための学習であり、ゲームなどを通して楽しく学習を行っていた。自分達も実際に参加して子供達と触れ合ったところ感じたのが、子供達はとても元気で見た目も清潔感がありとてもストリートチルドレンには見えないなと感じたことだった。また少し驚いたのが彼らの体格であった。彼らの体格は日本の同世代の子供より明らかに小さく、やはり食事をあまり取れていないのだなと思った。

路上教育を終えた後、参加していたストリートチルドレンのダニカちゃんにインタビューを行った。この子は川の近くの路上で生活をしている子で普段は5人の兄弟の面倒を1人で見ているため学校にも通えていない状況だった。彼女の将来の夢は先生になることであった。彼女へのインタビューの中でとても印象に残ったことがあり、それは欲しいものを聞いた時に答えがなかなか出なかったことである。理由は日本の子供のように欲しい物で悩んだのではなく、そういうことを聞かれる機会が無いことや考えたことがなかったからだ。そしてようやく出た答えも、魚や野菜が食べられる充分なご飯や安全に寝られるところだった。それを聞いたことが自分にとっては非現実的でショックだったし、これが現実かと痛感した。また彼女は先ほどまで自分と一緒にゲームをしていたときの笑顔溢れる表情とは違い辛そうさ顔していたのが頭から離れない光景となった。

路上教育を終え昼食をとった後に、カリエカフェを見学した。カリエカフェ

はフィリピンにある大学のなかで最高ランクであるフィリピン大学の中にあるカフェで主に勉強をするための場所として運営されている。目標は路上の子供達に対する意識改革を行うことで、そのために大学内に設置されている。そのためスタッフ達は元々路上で生活していた子供達であり、彼らがこのようにカフェを運営することで路上出身者に対する差別を無くすことへのアピールとなっている。彼らのように元ストリートチルドレンの人達がこのように活躍することが現在路上で暮らしている子供達への助けや希望となりとても意味のあることだと思ったし、この意識改革がうまくいってほしいと感じた。

最後に都市部の貧困層の家庭を訪問した。ここの家庭はパヤタスで訪問した所より家もしっかりしていて比較的には裕福であるが、やはり食事を3食しっかりとれていないことや、収入が不安定で子供も働かないといけない環境があり、都市部と言えど日本とは比べものにならないレベルの貧困であることがわかった。またこの家庭の子であるアレン君もダニカちゃんと同じように先生になりたいと言っていて、多くの子供達が教師になりたがる傾向があることがわかったが、その原因は子供達の周辺の環境では教師や医師などの職業しかないため、職業の種類に関する知識が乏しいからだを知り、職業に関する知識を路上教育で教えて行くことも必要だと感じた。

## 6. むすびにかえて

これは、前述の問題意識を学生の視点から学ぶことを通じて、学部教育における貴重なアクティブラーニングの実践として重要な示唆が込められている。自国優先主義や内向きのナショナリズムが跋扈する閉塞した時代状況の中にあって、積極的な義務を敢えて果たさんがために、国境を越えた社会貢献活動に果敢に挑戦してくれたゼミ生全員の健闘を称えつつ、今後の益々の活躍に期待を寄せる次第である。